

社会人学生に配慮した情報処理教材

The teaching materials of the information education for the society students

田中雅章[†] 今光俊介[†] 加藤成明[‡]

Masaaki TANAKA

Syunsuke IMAMITSU

Nariaki KATOH

[†]鈴鹿国際大学短期大学部

[‡]愛知産業大学

Suzuka International University Junior College

Aichi Sangyo University

1 はじめに

筆者らは社会人を対象とした通信教育課程で開設されている情報基礎演習を担当している。その演習受講生のほとんどは社会人でしめられており、すでに情報リテラシーに精通する知識を持っていることが少なくない。

将来、諸外国並みに増加するであろうと予想される社会人学生にとって十分に満足が得られるような教材や授業展開を試みた。今回その実践内容を報告する。

2. 演習受講生

今回の演習では 53 名の社会人学生が受講した。演習内容や進捗スピードを決定するために、演習最初に受講生の自己申告アンケートを実施した。受講者の自己申告によると表-1 のように「すでに文章作成ができる受講生」が 50%ほどいるが、逆に「まだ思うように文章が作成できない受講生」が半数近くいることになる。また、情報処理能力が高いと判断される上級者が 10%以上おり、逆に入門者が約 6% 受講していることになる。

申告能力	人数	比率
1. 検定合格	6	11.3%
2. 文章作成	21	39.6%
3. 少しだけ	23	43.4%
4. 初めて	3	5.7%
計	53	100.0%

表-2 受講者の能力

講師としては、一番人数の多い「2. 文書作成ができる」または「3. 少しだけさわれる」のどちらかの受講者にターゲットをあわせざるを得な

い。仮にそのような演習をおこうとすれば、少なくとも 60% 近くの受講生は十分な満足が得られない演習になってしまうことが予想される。

3. カリキュラム

これまでの一般学生を対象とした演習では、基本操作を絵や図で分かりやすく説明したテキストに沿って、受講者の理解を確認しながら進めればそれほど問題はおきなかった。さらに、受講生からはある程度の満足度も得られた。しかし、今回のように年齢層や情報基礎能力が広範囲にばらついている社会人学生の場合は、今までの方法ではそう簡単に通用しないであろうし、受講生の満足度も得られないと容易に想像できる。少なくとも、社会人学生が得られるモノあるよう何らかの工夫をする必要がある。今回、われわれは次に述べることを試みた。

1. 自己申告アンケートの結果を公開し、入門者にはペースが早いとの理解を求め、上級者には TA の協力をあおいだ。
2. 毎回、その日の演習が終わるごとにアンケートを実施し、進捗ペースの調整を行った。
3. 上級者はさらに効率的な操作ができるよう、マウスの右ボタンの使い方やショートカットキーの使い方を披露した。
4. 基礎の仕上げである応用教材として、日常業務でも使えるような公文書の作成とチラシの作成を選んだ。1 日目は、公文書中心の文書作成。2 日目は、ポスターの作成。3 日目は、チラシの作成を行った。
5. 課題は必ず印刷をし、受講生が一連の操作を理解しているかどうかの確認を行った。それらの工夫の結果、各受講者の満足度の回答が、表-2 である。1 日目は受講者にとってち

ようどよい内容だったのは55.8%にしかならなかったが、その不満は少しずつ改善され、3日目では71.4%の受講生がちょうどよい内容だったと回答している。

	1日目	2日目	3日目
1.よい	55.8%	69.6%	71.4%
2.遅い	19.2%	15.2%	8.2%
3.早い	25.0%	15.2%	20.4%
計	100.0%	100.0%	100.0%

表-2 速度の満足度

ただ、われわれが残念に思うのは、3日目に「3.ペースが速い」が増加してしまったことである。教材の内容がやや難しかったせいもあるが、受講生が操作の基本を無視して課題作成をこなそうとしたために必要以上の時間がかかってしまった。そのため、時間内に課題を終えることが出来た受講者は2日目よりも少なくなってしまうからである。その結果、1日目ほどではないが、「3.ペースが速い」と感じた受講生が2日目よりも20.4%と逆に増えることとなってしまった。

回答者の自由記述から分析を進めてみると、演習のペースについていけず進み方のペースが速いと回答している者がいる。また、逆に易すぎず時間があまってしまうペースが遅いと回答している者もいる。同じ講師が同じ教材を使っているにもかかわらず、このような相反する結果が出てしまった。

予想していることではあったが、われわれがどんなに教材や進め方に工夫しても、受講者の満足度を得るには限界があることがいえる。

4. 不満の解消

能力差がある混成演習の条件下で、教材や進め方の工夫のほかに、受講生の不満を解消するにはどうすればよいであろうか。

今回は、講師とTA2名の計3名の体制で演習を行った。全演習終了後、受講生に何名のTAが不足しているのか尋ねたところ、表-3のような回答が得られた。今回のアンケートによる自由記述に書かれた内容に「わからないところがあっても、近くにTAがいなかった。」「わからない人の対応をしている間に自分自身がわからなくなってしまった。」との回答が寄せられた。

表-3の回答や自由記述から読みとると、受講者の満足度を上げるには今回のスタッフに2名のTAを追加する必要があることを示唆している。

必要とする人数	回答者の割合
1人	16.7%
2人	31.3%
3人	16.7%
4人	14.6%
5人以上	20.8%
計	100.0%

表-3 不足すると思われるTAの人数

5. まとめ

今回は、一般学生と異なる社会人受講生に対応するために様々な教材の準備や工夫を行った。今回の研究で得られたことをまとめると、次のようになる。

- 1.こまめなアンケートを実施し、受講生の実態をよく把握すること。
- 2.ソフトの機能説明に終わらずに実用的な応用例を総合課題とし、受講生の満足度が得られる工夫をおこなう。
- 3.上級者はさらにステップアップできるように便利な方法や効率のよい方法を披露すると満足度が大きい。
- 4.入門者や初級者には、十分なTAを配置することにより、つまづきを未然に防ぎ演習に取り残されない配慮が必要である。

今回の研究成果は、社会人学生の対応だけではない。すでに高校で実施が始まった新教科「情報」をマスターした学生とそうでない学生が大学に入学してきたときの情報リテラシー教育にもつながるのではないかと考えている。

参考文献

- [1]坂野敦史・松澤芳昭・大岩元「コンピュータサマースクールの試み」2001年12月、情報処理学会研究報告 Vol.2001, No.122
- [2]石田雅・大野賢一・鈴木輝博・穂山知文・木村晃「コンピュータ・リテラシー教育と講義コンテンツの検討」平成14年度情報処理研究会講演論文集